

# 株式会社フジ / 株式会社エムツーシステムズ

## COBOLコンバージョンとパッケージを利用した汎用機からのマイグレーションに成功

- POINT**
- 9300本のプログラムをストレートコンバージョン
  - 財務会計システムは「SuperStream/400」で再構築
  - System iへの移行で劇的なパフォーマンス向上を実現

**COMPANY PROFILE**

設立：1992年  
 本社：愛媛県松山市  
 資本金：5000万円  
 売上高：13億3700万円（2008年2月期）  
 従業員数：65名（2008年2月期）  
<http://www.m2s.co.jp/>

### システム基盤の再構築を狙いに汎用機からSystem iへ

フジは愛媛県松山市に本社を置き、愛媛・広島県を中心に中国・四国地方で現在91店舗のチェーンストアを展開



**永井敬三**氏  
 エムツーシステムズ  
 常務取締役



**楠本均**氏  
 エムツーシステムズ  
 第1事業部 企画開発  
 グループマネージャー



**村尾純一**氏  
 エムツーシステムズ  
 第1事業部 企画開発  
 グループ チーフ

している。大型ショッピングセンターから、より地域に密着した小型店まで多彩な事業展開が特徴で、総合流通業が全体に伸び悩む中、順調に店舗数を拡大してきた。

同社はもともと30年以上にわたって国産汎用機を利用してきたメインフレームユーザーであったが、2007年2月、その基幹業務システムをSystem iへ移行し、システム基盤の再構築を実現した。

移行プロジェクトは2004年から始まる3カ年計画に沿ったものであり、この計画ではシステム基盤の再構築に加え、「ローコスト運営の実現」「パフォーマンスの向上」「経営上のリスク低減」「経営情報の早期開示」などを目標に掲げていた。その背景には、店舗数の拡大に伴うデータ量の増大や、複雑化する業務要件への対応があり、こうした経営課題を解決するには、抜本的なシステム改築が不可欠と判断されたのである。

実際に移行プロジェクトを推進したのは、グループ会社としてシステム全般を支援するエムツーシステムズである。同社は1992年、出資会社であるフジおよび株式会社アスティ双方のシステム部門が分離独立する形で誕生した。グループ各社のIT支援に加え、広

く外部の企業に対してもシステム開発やパッケージ製品を提供している。

フジのシステム基盤を再構築するに際して、その選択肢は3つあった。国産汎用機の継続利用、UNIXサーバーへの移行およびシステムの全面再構築、そしてコンバージョンをベースにしたSystem iへの移行である。

このうち、汎用機に関する（主にエムツーシステムズの）システム要員にオープン系のスキルを身につけさせたいとの意向が強く、また汎用機の継続利用はローコスト運営の実現が難しく、飛躍的なコストパフォーマンスが望めないことから、早々に汎用機のリプレイスは選択肢から除外された。

「当社では実は1996年頃から数台のAS/400を導入し、Notes/Dominoやデータウェアハウスを搭載して、フジへアウトソーシングサービスを提供していたので、System iの信頼性の高さは十分に認識していました。System iはオープン系の技術を取り込んでいるのに加え、汎用機上で稼働している多数のCOBOLプログラムをコンバージョンする場合、System iであれば移植しやすいとの判断が働き、2004年5月にSystem i (9406-570) の導入を決定しました」と当時を語るのは、エムツーシステムズの永井敬三常務取締役である。

## 9300本のプログラムの コンバージョンを実施

汎用機上では単品管理・顧客管理・管理会計・財務会計・人事給与などの各システムが稼働していた。これらに対し、それぞれのシステム特性や業務要件を考慮して、「プログラムのストレートコンバージョン」「パッケージ製品の導入」「Javaによる新規開発」の3つの手法を組み合わせて再構築することになった。

汎用機上では約2万本のプログラムが動いていたが、これらを9300本（CLPおよびバッチ・帳票・画面系のプログラムを含む）に絞り込み、System iを提案した日本ビジネスコンピューターの支援を得て、コンバージョンを実施している。

また財務会計システムについては、パッケージ製品として「SuperStream/400」を採用。人事・給与システムはUNIXサーバーで稼働するパッケージ製品を使って再構築した。

プロジェクトのスタートは、2005年5月。コンバージョンについては5～7月

で設計、7～10月で量産（ツールを使用したコンバージョン作業）を終了。2006年2月には、約200本のCOBOLプログラムで構成される「友の会システム」だけを先行的に本番稼働させた。

「独立性が高く、ほかの業務に影響しない友の会システムを選んで、パイロットシステムとして先行本番稼働させたことにより、コンバージョンツールの信頼性や移行にかかわる作業ボリュームの想定ができました」と、楠本均氏（エムツーシステムズ 第1事業部企画開発グループ マネージャー）は語る。

また単品管理システムと顧客管理システムを2006年8月に、管理会計システムを同年10月にと段階的に本稼働し、2007年2月にはパッケージ導入を主とした財務会計システムと人事給与システムのアドオン機能に該当する部分が本稼働。全システムの移行が完了して、全面本稼働を迎えた。同時に汎用機は撤去されている。

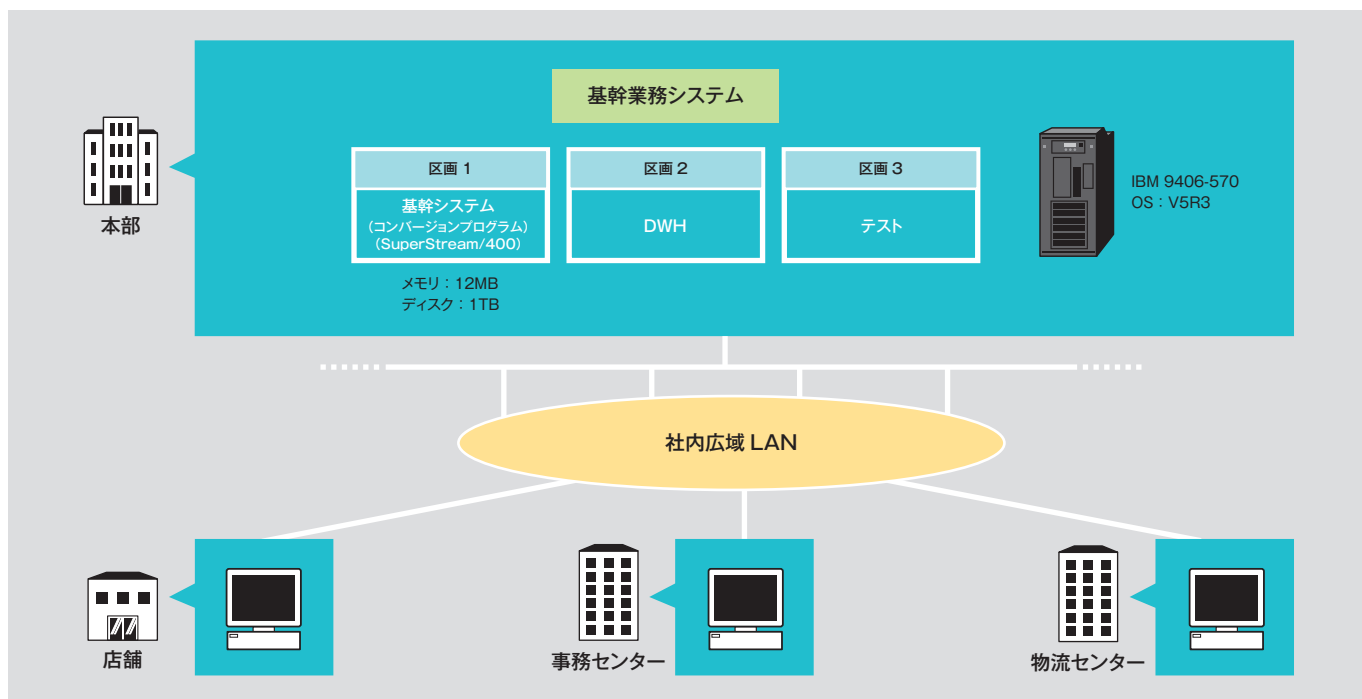
「全面移行までは汎用機と並行稼働させたので、インターフェースプログラムも汎用機向けと新システム向けと、常に両方に対して開発するといった2

重の作業が発生しました。またコンバージョン、パッケージ導入、新規開発という質の異なる手法を同時に進行させたため、プロジェクトマネジメントには最も苦労しました」（エムツーシステムズ 第1事業部企画開発グループ 村尾純一チーフ）

System iによる今回の再構築により、当初3カ年計画で掲げられた目標はほぼすべてクリアされたようだ。

例えば、パフォーマンス向上について言えば、単品管理のタグ新規処理（約5000件のデータを20万件のマスターに更新）が、従来の処理時間60～120分から15分へ。伝票発行（約1万件のデータ更新）は30分から1分30秒へ。財務会計のWebマスター更新処理では25分から1分30秒へ劇的に短縮された。

また一部業務の自動化などにより運用管理の負荷が大きく軽減されたため、同社のシステム要員および外注要員の数はどちらも約3分の2に削減された。外注コストや運用コストの削減に加え、システム要員をほかの業務に割り当てられるなど、生産性の向上にも大いに貢献しているようだ。 **i**



図表 フジ/エムツーシステムズのシステム概要